雙魚晝日誌

大正八年
二月以降

特別
14
1919
584

176849

渡邊重日誌

大正十一年二月以降

二月

一日

晴今年ハ一別而暖ニ有之候ニ付キ大根引つき大根漬ニ致候事ニ相成候ニ付キ午後ニ

を送る。

七日

晴、博子嬢の家の向隣りの内祝しも去る十時より始め例年私の重役をと協議の件をもち協議す、往利業組織の編纂今組織案を稿す、晩間散業神田の出店に開き大隈侯傳記編纂を協議、午前より午後に亘るこの頃打ち合せをなす会を内

定之事、同志多数并に遠方の者の形式を両刻せ限候條、午前中に参着未面之事

八日

晴、小雨三来る大隈家葬儀費収支の決算書報告もて来る、高須芳次郎を訪ふ会の模様を聞く、高須曰く八九分通り成功と雖も会場二三教室を併せ、高須を

拾二日 御物のかえ
渡す 晩百もを(ま)中縄結集に入り
又わかしもうる、の出中 仲内三位 焼
海仏の方供信納後の型をおろ来
り金子鋳室をもとも、古物第垣な
りまもも、又来絶(ま)ても利る後の大
雨

九日

晴、仲内三位来訪方農家に泊也を打す、
室葉の事社ともも(ま)般金子方農家に泊也を打す、

等移と書し五十日ともを渡ろる
原井一行お宮へ久江室一寸泊寄のも
ろ海り程そのもを理室出殿即ちも金二
る日也方農後急ろ和原殿 野内室指
一元、放日中赤郵ろ、大渡ろる分室(ま)二通の後ろき
郵ろ、十二時交前社ら利り帝通の重被
利ろ、十二時交前社ら利り帝通の重被
含ら晩ち、疑後数ろ社ら利り帝通の重被
仲室、高須ら出数をろす、拾又室ら
三十日掛ろ、打ち室ら
百日掛 公の岡奉をも比谷

[illegible]

十、

晴、午後より陰、夜に入雨、
梅屋中井邦之助来る、高須
峰来る、高柳萬坂より
帰る、杉若雪堤
晩利兵衛来る、山清寺
温泉まで(三里)に行、帰
路と共に映畫を見る、

十一、

晴、大隈侯の逝去を
出る多くの哀を零す、高須梅屋に
す、未だ別れも云はず
永訣と云ふの、十二時永楽座
宗郎と共に松平(伯)塩湯日比谷と
金子、午後大隈家
宅を学校へ寄り湯
川隊也山清寺
川隊也山清寺

内務省、給与教育第四千幼、北侯爵
五十番 同也、当
老侯の遺址を保
ものを保存
ことを、土地の三分の一
印しを要
可なり、
得べしとするも、
延租税を
さるものあらん、
と指着す、浦

あり、それ等と交渉す、早大でも十九
大隈侯追悼会通牒到る、午後零時を得
除て雨後温暖と為る、午後快
晴予ら一行徐ろに美山源之助を訪ふ、
病床に伏す事数旬、

十三日

晴、山田病院長谷川誠也来訪、十時半早
大図書館納と到り学の校の内容完備善々
金をつかふ、善美を尽せり、大隈侯爵令嬢
高田と共に来る、午後四時半散会、大体の打

今年も亦すべき事
なき後、数年来の
荒平の風雪を経て神のこの国を
内に保ち給ふこと、多謝の外
夫人の訃到る、

十四日

晴、教会に出席す、午後
文求堂を経て帰る、揚子新報を
見る、揚子新聞社長
陳、内藤を訪ふ、不在、

此月中と雖し、村々出方、三分の発
も流行仁妻の股不
勝山珍事ニ候、七十五日大限候為
没後自死の為め森
記ス如ク也ト雖も痛し今日相続
其儘ス。

十九日

雨、平井準輔松山逗留中の紀事を持大
隈参朝像写真を示す、中途発向
即方、書ス、内務を以て紀事を贈ル

記ス、村々皆庶ニ出、村々五十両許、村々
聖武村竹内徳子ニ而を過ぎ
先を経て出路、鎗ヲ置ス、ヨリ
七、ヨリ、物売待而
出筒を打ス、市河三陽の来庵と山陽
(原名主西面ニ有)を読む

二十日

雨、古記書三海外信来読、而忘筆録を
其しもするを清ス、午後出府の事
後学と悩み、又早大の維新実学ニ列ス

雨雲、無論会津の降雨を以て
利根上流の降雨の例の注射を施
す、但此の注射の件を有栖村高橋甚
兵衛君より聞き大に喜び
若大隈侯一言一行と称する
を示さる即時不
一面付す、過日高吉塘在、有栖義
庵と出社を勧めます、沼田降雪深き
ため出社を断ります、午後二時の汽車
にて高田へ向け出発します、大

右之通同し處を遠筆奉答を乍
乗客を盛を沿道重
おも筆陵の一人
ニ高オクの投ポ建
参加す大体の御合
筆仕る六時前
校生の雨を衝し校
月数三千雑踏行路
も此の光景を目撃
く喜ん、木崎湖畔
つき来電

[illegible]、杉井郡治久綴美委[illegible]程村委ハ
来明美物交[illegible]
[illegible]ら之名中[illegible]才三冊并ニ附図ヲ以テ
[illegible]京方面実況
指揮ヲ為ス[illegible]二十冊、綴大阪大[illegible]
剰ヲ無ク大阪大[illegible]股在[illegible]
業上ノ[illegible]
審査ヲ乞ヒ[illegible]
業十冊（印刷ニ附[illegible]
[illegible]ル未済ノ一書ヲ添ヘ、午後[illegible]

[illegible]御[illegible]
式ニ依頼[illegible]
定ニ、今[illegible]
今一志保[illegible]
ヲ協議[illegible]
決ス中林[illegible]
生命保険[illegible]
東都株[illegible]
今通知[illegible]
ますゝ[illegible]

晴、竹村氏を訪ふ、帝国の体裁、沈毅一時も来ふの自動車を用ゐ、井口大湯侯立寄の筈にて午後二時教業研究会を開く、三沼を以て終る、

二十日

晴、竹村氏を訪ふ、帝国の体裁、沈毅一時も来ふの自動車を用ゐ、井口大湯侯立寄の筈にて午後二時教業研究会を開く、三沼を以て終る、

を納めん、今津八一ともも仲秀の報あり
和名文三ともも又切立ち筆ともなど

二十日

時、仏伯和尚来訪、午餐を共にす、
話柄も今津八一事より転じて梵字研究となり
殊に石佛研究となる、午後三時半頃同氏帰去
る午餐を共にせる石佛同好一軸を贈呈せり
書三通を認む、午後七時半頃より入浴、
夕食を終り、午後十時過ぎ就寝す

二十一日

午前十時頃より入浴、
午後一時半頃より入浴、
午後三時頃より入浴、
午後五時頃より入浴、
午後七時頃より入浴、
午後九時頃より入浴、
午後十一時頃より入浴、
午後一時

又ひ村大丸社もと書きたる事も

廿一日

晴、朝来二三のうをもとめ、山田屋佐兵衛
八重姉、宮田屋より報ありお悪候の由
悔後をとふ、昨夜の海嘯ことの外
物凄く十一時ともを出
松前の二三も矢を流して注文書数通
注文書に志士本と海心、
松宮書に白良久保
湖州を次し帝と改し映

書を納物請取の
郵もの書状
出船紀本を告ぐ、

廿二日

晴、朝来雨、午ごろ止む、
七時宮に渉り出船
お二出て乗二度船八し伴ち棚橋す、
閑を得て雑帳を整
度もし書生すべき
列生す、高橋義彦

時、皆事無事ニ而相済候ハ、
ハ、其儘ニ而ハ済ス、漸々ニ而ハ
中ニハ、僅之事ニ而も、
時ハ、夕刻前ニ而も、
陽ニ而も、
皆々ニ而ハ、

二十四日

晴、
ニ而、
永楽ニ而、
又ハ、
ニ而、
ニ而、
ニ而、
風ニ而、
ニ而、

二十五日

晴、

作業に於ては前日実施せる
砲兵との洋行を参照し五十日間を
以て終了、兵隊の気を老ます、今日八一
日休養を為す、明日実施砲兵連隊
教程を始む未だ下村和助氏の使を以て
お知を賜る、午後九時頃
三十七度七分ありて、

を促し終ることすら許

二十日
雨雪を冒して、竹村氏を慶井一森明美樹等訪ふ、先方、喜衣布団を供給拙をす、拙著大明天啓傾一言一行録未了、舎津八一に於り二十部手元に来る、舎津八一に於りの初刷を持参もせよと勧めて至りし(玉山来るも喜ぶ画冊を包まれ)、玉山来るも喜ぶ三色画眉草を田ん列る、雪色に狩り天地蒼々たり、拙著の内葬儀の一節

エデリケートの誤植多きの訂正文を巻尾に貼付すること、前例所に拙念附録す、今後一言一行を慎まんことを

二十一日
晴、早朝稲村を招き一文一行中絶互しを訂正し校訂の労を交ぐす、宮田正と昨日追悼録に掲載

すべき筈の後始末を草稿をも、十時
大濱邸に到り五十日祭に付候の霊をも
す。畢つて千葉の縁を尋ぐ、未だ有
二る哉つすれ、特に テントを張る事
を二今る、濱浜伝記編纂の件を今
衆に男表没自分をも含む
推す、他の皆体あまりを以て協議の上
皆先に云也二時半、今日は一に
出をもつて、前号の如く
早く寝ぬ

三月

一日

晴、市役所の浦一に吐事の未だ
五十日余に)松の内過ぎ
迎村云る。木場勝吉
編纂参考の為の親
桂湖村来訪
梅屋敷並木亮又来る、夜も
就寝を告し
る、寝後暗
の客を入れ

やん、日清の開戦
なお、新利文、前田実ら海軍人
る

二日

時、程村宗八ら金ら迎若狭屋
弁柳城、森脇来る昨夜伝兵大
隈侯伺把綿喜金の契約并ニ教
育勅語ノタイプライター
物ニ出来、大隈未亡人ら名ニ招う
み十時別ニ高田しく招えて

病等ニ就て同
為ニ侯の未亡人ら
為ニ侯ら重要ニ打
重すべきやを尋ね
んとて元揖斐
金ニ於ても
可とし自ら勲功
又未亡人ら邸内ら
ゆう有り早稲田大学
土地ニ四七千坪を
受けるまでとそう
心う死後ら土地

侯の
故のごとく布ニ
為ニ侯記ありしと
金ニ於ても
又未亡人ら勲功
ゆう有り早稲田大学
土地ニ四七千坪を
受けるまでとそう
心う死後ら土地

郵之の校、普ふ出ん後の行
もすき校するまのきやと
話あり、至着そ黄之状をも
至くべしとくし出ず、未六八之地の
之ものこ充候の祝者をも此りそれとそ
校く他の物すとも約さる、斯るすせ
新候爵と御交を暇すきまの之
と出即郎こ至ふ(十一時
後ろ高城すまあり、高のの自動
車一を借りこ

通の電線ふそこ此の如き故障ある時は
東を決しこ三時間内外にて
しる余こ着すべし梅原、高
行出来こ付立こ出張の丸(ござ
候哉を電話を以て
ご通知ありたし山本吉広
三十八日朝、杉雲発
五日朝入、出張部の
大体其ふそを自家通の為等
を始る、右ふ之通しておす

三日

晴、夫吹家へ寄る。廣井一家幼
竹治比紙あり。掛書美樹のもの
一言一行」を高家内森冊共に
次号社寄井ホ三通迄す。樂こ泡志冊
真の路住城へきり、坂田四奉書
詩物生助し件
手を拡り、十一時
組庄屋へ出延
映畫を観、帰
香典三

雨、早朝松文来山庄来石用施本を交
付す、森代金幼
西義ら七一行
ひ、栗脚来訪、一
関本ニ銘乳状
特を務す、午後
手をもし、出助訪
こ到ひ、訪侯爵と文
終て、武市田三枚坂本(高沢也)
とせこ侯の後記

晴、後上弘前市ニ行ク

曇天、田村まつ子ノ為メ弘前市ニ行ク

雲天、田村まつ子ノ為メ弘前市ニ行ク

晴、後上弘前市ニ行ク

晴、後上弘前市ニ行ク

件ヲ協議ス、池田孔一長男死亡ニ付キ
山梨病ニ利ス、香典我田壱ス、午後大浪
邸ニ指ヲ未ニ入ル、侯ヲ人ノ病ヲ
ニ着手ス、侯ヲ人ノ病ヲ
ニ及文書発ヲ約三十、ニ、北入ト
ラン夕四五個、会利入ル七個方ヲ
発ヲ約十個、北内ノ病十四五ノ文
報ヲ発シ、ソノ二三トランクヲ入
レ置ケルモノ外ヲ
ヲ発シ会利三個祝ノ不用ニ十ヲ除
外ス此ヲ完ニ次ノ如キ

十

朝来雪ヲ降ラス、午後降ニ変ス、町ノ出入ヲ得
ス、町ノ出次第ニ為ス、ヲ程ニ由ヲ
ノ如ク、今日ハ一
ヲ発シ、晩会ノ発ヲ受ケ
ヲ個ヲ発ス。

七日

朝来雪ヲ降ラス、午後降ニ変ス、北ヲ
降ニ未ヲ、ヲ程ニ未ヲ、ヲ
ヲ移ス、来ヲ、来ヲ
ヲ発ス、十時ヲ

午後一時より社務所にて大講師に指名せし神官と引つゞき役員会を開き、次に氏子総代会を開き、関右京井一等祝、今津八一郎氏等出席、一ノ宮事務

八〇

晴、寒井一等祝、森脇一等祝を招き、午餐をなす、十一時より生花教室に出席、帰宅後田原氏を訪ひ、引つゞき琉球踊を見る、夜に入り帰宅、深酒一合程にて就寝

朝鮮婦人会、朝日新聞社、毎日新聞社、婦人之友社、婦人倶楽部、婦人画報、婦人公論、婦人サロン、婦人世界、婦人生活、婦人界、婦人文庫、婦人之国

す依頼困難なる事也一言一行一冊三
帰美しの二興ふ書拓面拓もまた、
毛楷内容考旅焼と衝突漸やく危
二瀕す。

九。

時、雪田本生(有人)山下拳名等務、先候像
記編纂会報告を行す、十時も生附
部と到り中晩礼四印、森鴎外博士と共
候伯記編纂会今仲介を掲載す
す所あり午後一時大蔵部二到り市商

[illegible]
なるもの、公村一
覚書海到 田舎の文化尾
商業会もの関西二開きの文化尾
を問の、大阪侯家後室のつ拓の
熱を助きむ重度もの 亦
三華の郵便局家地中もの郵
行文化と 大用と二
郵とう大阪家と交涉す、寝待
真鳴るも過電、二三日の附(有人)ふ決
すとす来る、今晩八一ふまた来る、

十日

昨廿三日京都商業会議所ニ於テ村大丸
の慈善事ニつき寄附金を開くの
通知状到る、先候編纂会ニ仲有内
春之亮と申ス者ニ而ハ無之哉ニ
即ち此ヲ書ス、公村一大ら
ス、公村一大ら
言一行一冊寄ス、村井弥ら

十一日

昨夜一時頃ニ京都ニ着ス、直ニ
人力ニ而ハ無之哉ニ
即ち此ヲ書ス、公村一大ら
ス、公村一大ら
言一行一冊寄ス、村井弥ら

十日

昨夜一時頃ニ京都ニ着ス、直ニ
件ニ付東脚先候編纂会ニ而ハ
編纂之事録ニ事件ヲ記ス、大隈侯
ら先候の紀念ニ為ニ庶事業
人物図幅一七大河内侯五十五
枚ノ表（題辞ハ）ニ而ハ大隈侯
既也、山田市長ニ而ハ
ら千五百円ニ而ハ
向上ヲ（題辞ハ）ニ而ハ
断ら京都ニ而ハ

の期なりき二日 僧八指若股美
伴す かかの
十時六時文
汽 老侯伯紀の伴
機の赤電到る 直
為向ふ出来ぬこと
部到り後玄 昨
し貝タラ往二葉路
と学校の童男問
博士埋骨式 紀
帝典其他供物

十二日

曇天、新治郡井川流域を主として
悪性瘧疾を四月
報ず、早朝没
分布甚だ
を報告し、
治せし
しを千円
之ぶ、今は
居れども
り来る、
録を筆す、

十四日

雨限候
例に
治文の
行出收の件
時る、午後大限

本（表法馬）等を物
并営業等募集
も大木操氏も
を載す。山田秀退
と事也。

十五日

昨日御用納
托する事なく帝国
八出版部の任書
千五百円もて
出版事務を

十六日

立案等来訪
を受けたる
こありと荷田信士の
人疑を生じ
未だ素より
住のを出
本四冊村
冊贈る。銀
言ふと云、

時、麻生二心庵もまた廣井、林山の森
腸亭の汾、竹るに引続き坂木石二人来る
午後理髪、四時内幸町工業俱楽部
に到り文明協会の評議員会をつゞく
今十餘名、会もまた社服の報生をもつ
参会者の遅参を俟ち、汾候等を今長
こ推すの提議をもつて満場の賛成を
訂会也、大濱代表者の挨拶ありて、今の新
会と記き協議する不あり、来月候の方
策の時迄押会をつゞくることゝ、毎年候や
も進院まで之を記念会をつゞくる事也

十七日

雨五郎兵衛町雅叙園に森脇君の為め
発会の会あり到る、森脇君は文明協
会の為め押会をもつて来る、発会を
用のため来る、発も会席に一年あるも、年
此つゝれ長明方抜す、五年の訪問一
も好るも、午後帝去り無聊を慰し、

十八日

朝、小雨、午後晴、

雑録を書し時を移す。

十一日

晴、朝来南の便り来る。郵の回文来る。列り三十四むこと雅むを得ず。真鳴信俄剣士典二ども来る。吉田来る。未だ来ず。来訪を約する。来脚を煩す。来訪、外門客ありしも来る。午後田中物江来訪。二百蘭亭南印放を贈を以て来る。隣家を退する竹嬬俊記成る。早大より井口の雑

持参するに所すべき誠業を郵送す。来る。

十九日

晴、土岐乾堂来訪。拙を守るを以て一神書と応ず。二三種を携来る。指紀編纂会の書類一切を携来る。文部省より編輯を許可の事。午後吸江斎来訪。大隈侯爵より古稀祝賀の件を談ず。拙木屋甚平口と侯屋の境界の件を修む。生駒親敬も同氏の

本文見本摺を教部省へ送り来る。真崎該村の造酒出願の件、有栖川宮へ一書を呈す

二十日

曇後小雨を乾燥の景合なり。多助志と言めるの書印の摺物をつくる。吽々分。お馬由也七まり降雨にて摺物休し。雛物其他抹茶菓子にて方拵を協議す。笈箱の方針を立事てし午後より

お協議を継続し、一時半大生殿新の垂後をうかゞふ。二三の客を招待す。独若一言二行半大六言行名の垂をうかゞふ。三言の脱のうち曾て一言なり。時も早大生殿新の垂後と大隈卿を訪ふ。十一年分弥の弁を決す。後と大隈卿をうかゞふ。一九と弁のうちあまを決し後と大隈卿をうかゞふ。百弁の用弁と大海重吉

菜七ツ弁用弁高田を垂弁ちうし。垂弁高弁を拵ふ。

廿二日 午前六時半頃輪台ヲ出發 午後出發
訪 牧平氏 留守 壻ヲ伴ヒ復來ル
廿三日 午前 編集會議
廿四日 午前九時ヨリ 早大建築委員會
ヲ開ク 出ル

二十一日

晴 朝來大降 午後編集會議ノ後 散會
稿ヲ了ス 休刊 溝二ヲ訪ヒ 別着一ヶ月許ノ
家ニ寄宿シ 都合悪ク 隣ノ空家ヲ借リ
移ヲ施ス 隣田實博士ヲ訪ヒ 洋行ノ
告別狀ヲ出ス 午時本澤來ル 地ヲ拂ヒ
ヘラ、谷村一太郎ヲ訪ヒ 地ヲ拂ヒ
畑ヲ整理ス 紙地 玉ヲ盛ル

二十二日

晴、今朝ハ一寸ヲ合津并
ニ石川萬八ニ至ル、朝早出發 新潟ニ向フ
ノ日本史 流布ノ方法ヲ
提案スベキ 方法ヲ
ノ編輯ヲ 終ヲ
發新潟ニ 午後ヨリ

…関民史収集…
時を…木梅何…
今の…を俗し…三期…
…梅孫…、…
今十時…
未也、一言一行…再改と決す

十三日

…時、会津八一…早中…
の…を…し来る、出版…二日借入期…
未一言一行を…訂しまばるべき…高…

…来訪、…
…ふ者二股を出すの…訂正を…
…也、松平…
…改…成る、…
…而遠之帝…
…ふ、所得税…る土田…
納付十年…来四期…也、…
…ふ…婚儀…
…る、扱れ…
帝通…
社重役…

村にも會社を退き他人に委して新生面を開かうとせられ、歸路神田の村田氏宅に立寄られ、同氏の圖書を觀られ、大隈侯爵記念會に關する意見を述べられたり。

廿四日

雨、高須指原兩氏來訪、午後七時頃より、一昨日を以て文部大臣を辭せられ、九時より文部大臣官邸に於て大隈侯爵記念會に關する協議會を開かれたり。

廿五日

晴、朝來編集會議に出席、午後七時より、一昨日を以て文部大臣を辭せられ、九時より文部大臣官邸に於て大隈侯爵記念會に關する協議會を開かれたり。

廿六日

晴、朝來編集會議に出席、午後七時より、一昨日を以て文部大臣を辭せられ、九時より文部大臣官邸に於て大隈侯爵記念會に關する協議會を開かれたり。

廿七日

晴、朝來編集會議に出席、午後七時より、一昨日を以て文部大臣を辭せられ、九時より文部大臣官邸に於て大隈侯爵記念會に關する協議會を開かれたり。

廿八日

晴、朝來編集會議に出席、午後七時より、一昨日を以て文部大臣を辭せられ、九時より文部大臣官邸に於て大隈侯爵記念會に關する協議會を開かれたり。

廿九日

晴、朝來編集會議に出席、午後七時より、一昨日を以て文部大臣を辭せられ、九時より文部大臣官邸に於て大隈侯爵記念會に關する協議會を開かれたり。

卅日

晴、朝來編集會議に出席、午後七時より、一昨日を以て文部大臣を辭せられ、九時より文部大臣官邸に於て大隈侯爵記念會に關する協議會を開かれたり。

卅一日

晴、朝來編集會議に出席、午後七時より、一昨日を以て文部大臣を辭せられ、九時より文部大臣官邸に於て大隈侯爵記念會に關する協議會を開かれたり。

晩、風、本間使四宇三郎の依地改革案
につき協議、その要点と実地を踏査
着手について打ち合わせある。井二高才学校
并に私力実験学
部と主なり高須梅作を一行来庭
校務について懇談す、休内者不在
梨果一函を贈る、直に礼状を出す、
不在桂湖村参泊、懇談する

廿七日

晩、風、本間使四宇三郎の依地改革案
につき協議、その要点と実地を踏査
着手について打ち合わせある。井二高才学校
并に私力実験学
部と主なり高須梅作を一行来庭
校務について懇談す、休内者不在
梨果一函を贈る、直に礼状を出す、
不在桂湖村参泊、懇談する

廿八日

晩、風、本間使四宇三郎の依地改革案
につき協議、その要点と実地を踏査
着手について打ち合わせある。井二高才学校
并に私力実験学
部と主なり高須梅作を一行来庭
校務について懇談す、休内者不在
梨果一函を贈る、直に礼状を出す、
不在桂湖村参泊、懇談する

廿九日

晩、風、本間使四宇三郎の依地改革案
につき協議、その要点と実地を踏査
着手について打ち合わせある。井二高才学校
并に私力実験学
部と主なり高須梅作を一行来庭
校務について懇談す、休内者不在
梨果一函を贈る、直に礼状を出す、
不在桂湖村参泊、懇談する

卅日

晩、風、本間使四宇三郎の依地改革案
につき協議、その要点と実地を踏査
着手について打ち合わせある。井二高才学校
并に私力実験学
部と主なり高須梅作を一行来庭
校務について懇談す、休内者不在
梨果一函を贈る、直に礼状を出す、
不在桂湖村参泊、懇談する

卅一日

晩、風、本間使四宇三郎の依地改革案
につき協議、その要点と実地を踏査
着手について打ち合わせある。井二高才学校
并に私力実験学
部と主なり高須梅作を一行来庭
校務について懇談す、休内者不在
梨果一函を贈る、直に礼状を出す、
不在桂湖村参泊、懇談する

二十七日

晩、風、同志的大会（四月休一日より）の為
諜到る、十時永楽座に集合、午後大隈伯爵
演説会を開き、参集方五六千名
殿まで参加す、夜半
会場を三ヶ所に分ち、余の為元気又活
上下二冊の内を渉猟し、細字
約二百頁を終る、石川先生へ内藤久寛より
来る

時、朝鮮細雨を冒して来る。海峡のうち、電気、内務大臣より電報を以て、立憲政友会の解散を命ぜらる。午後、内閣書記官長、珠数を贈らる。午後、内閣書記官長、珠数を贈らる。

二十八日

時、野津旅団長、来訪。午後、帰国の途に就く。午後、大阪朝日新聞社、来訪。午後、大阪毎日新聞社、来訪

二十九日

晴、風、長男勇吉のこと六才、数日病気の処、今日午前十時頃入院、松山赤十字病院に於て診断の結果、痘瘡にあらずと決し、安心を報ず、祝す、しき大洪侯倫記倫夫人十二時二到りやむ、森林郎、村馬を祝す、

論、古記事二、裏新聞紙の表を論ず、後村二寄ふ、

十四日、御油、山本、西尾、岡崎、吉田、二泊、三河国八ツ橋、名古屋、熱田、桑名、四日市、石薬師、庄野、亀山、関、坂下、土山、水口、石部、草津、大津、三井寺、京都、

三十日

晴、四月三日昨日、栗田口功伊勢貞丈二家の墓を世田谷大吉寺二移すに付、貞成名代として、松山五郎左衛門と共に乃ち流す、松山五郎左衛門入谷の件に関す、中村芳昨日この旨を

裏面、日清印刷会社伝授金二百五十円裏名義会社二百五十円納ム、石川蘭八ヨリ裏書を貰ふ、

を貰ふ、

裏面、日清印刷会社伝授

一日

晴、内務大臣より、今津八朝鮮先山与吉外九名勲十数枚を交付す、古賀関大尉より一言一行を以て人を遇するを要す、森脇と海蒼生の朝鮮人を招待す、夜江湖会館に於ける朝鮮人を招待す、夜江湖会館に於ける

茂す、午後神田に散策、公使を訪ふ、終て中央停車場に赴き、明日宮内大臣の洋行を送る、帰路不用書を購ふ、帰邸後、先山家兵衛より来状を得、帰郷の途に就く旨を報ず、古賀関大尉より一言一行を以て人を遇するを要す、森脇と海蒼生の朝鮮人を招待す、夜江湖会館に於ける

二日

晴、坂口氏来、午後十時見山壽佐の義弟大石現周文と来訪、不動産売買の件に付来談、五十公邸浄念

寺ヲ千年ニ、午後ヨリ村ヲ出テ、同ニ婚礼ノ勤ヲ終リ、日没ニ主家ニ帰ル、又朝又来ル、上下終ニ上野ノ博物館ニ列リ観ル、一茶亭ニ入テ午飯ヲ喫シ、雑談云ヒ尽ス、一人ニ百ヲ与ヘ、沢田ノ元業ヲ賞スル為メニ今ヲ以テ北京ノ旅遊ニ発ス、

三〇

明治二十年大ノ世芸術義勲等ヲ列

紀元二千

二日曇ル、北八接住ス也、日晴ル、剛気婦実保証金拂込ニ去ル廿日未タ到ラス、不応着ス、依テ未タ株券ヲ受ケ取ル能ハス、仍テ申受ケ後来ニ貫ヒ度キ旨ヲ交付ス、元ノ株券ヲ以テ千ノ株券ヲ受ケ取ル筈也、大阪ノ砂川暖吉ヨリ早大統計学ニ付一ヲ乞ヒ来ル、依テ之ヲ写シ、沢田文治ヲ以テ大島君ニ送ル、三月廿一日晴ル、統計一部ヲ終ル、暮ヲ告ケ、錦之山庄ニ帰ル、村ノ出庄

[illegal]
[illegal]
[illegal]

時、明治四十四年一月一日
叢邨林二校訂

雨、高井君来る、午後八時頃迄滞在、
本間様へ田代四郎五寸美術八
寸美術共寄井一斗酒二升寄贈、
午後五時頃より中村邸へ晩餐ニ招
かれ行く、邸宅修繕ニ付高談あり、
珠玉会、十時頃帰宅、
金三十円拂入、十
月の重陽会を始め十時頃迄閑
の十四日紀念会ニ関する、歴
会を催す筈ニ付幹事諸君
拂入ル、
拂入ル、
田楽田切本膳、
大隈侯爵邸ニ於テ開催、結
局当番ニ付朝九時頃
不二も奴凧を揚ぐ、
二階ニ於テ三時頃迄
於テ昼食ス、
午後ニ至リ時々
おも掃潮し三時帰宅、中村同道
諸物を贈る、夕刻
山本宅ニ回ル、

時、森脇美術倶楽部ニ於テ書画会ヲ開キ、吉村氏、天寿ヲ祝シ、書画数十幅ヲ出シ、同氏ノ手許ヲ離ルヽヲ惜ム、珠琅会ニ於テ、四本堂小集ヲ催ス

十一日

時、阪上弥栄堂ニ於テ、日本画ノ展観ヲ催ス、阪口五峯ノ出品ヲ見ル、午後ニ至リ、自動車ヲ傭ヒ、今宮ノ一寓ヲ訪ヒ、同所ノ四条派ノ古画ヲ観ル、夕ニ及ンデ、帰ル、

十二日

八ノ人ノ出品ヲ観ル、午後ニ至リ、又、阪本某ノ蔵品ヲ観ル、（支那ノ古銅器ノ陳列（支那ノ古銅器ノ蔵品ヲ観ル、又、某ノ蔵品ヲ観ル、）

時、阪上弥栄堂ニ於テ、日本画ノ展観ヲ催ス、阪口五峯ノ出品ヲ見ル、午後ニ至リ、自動車ヲ傭ヒ、今宮ノ一寓ヲ訪ヒ、同所ノ四条派ノ古画ヲ観ル、夕ニ及ンデ、帰ル、

十二日

八ノ人ノ出品ヲ観ル、午後ニ至リ、又、阪本某ノ蔵品ヲ観ル、（支那ノ古銅器ノ陳列（支那ノ古銅器ノ蔵品ヲ観ル、又、某ノ蔵品ヲ観ル、）

七名加、五名不参、誤診と判せられ
する也、五名出ず
燭の典を営む
帳を贈う之れを祝す、
十四日交付う、休日
到る、午前中郵便
二協約の生る、

十日

晴、森陽侯私邸葬儀、東京、青山

外国語学校に入学し、後に海軍
兵学校を卒業の後、海軍大
尉従七位勲六等に叙せられ、
日清戦役に従軍し、威海衛
攻撃の際、水雷艇隊指揮官と
して、敵艦を撃沈し、勲五等
功四級金鵄勲章を授けら
れ、後、海軍少将に進み、
明治三十年予備役に編入
せられ、同三十一年貴族院
議員に勅選せられ、同三十
三年枢密顧問官に親任せら
れ、同三十四年正二位勲一
等に叙せられ、同三十五年
男爵を授けられ、同三十六
年功一級に進み、同三十七
年伯爵に陞叙せられ、同三
十八年薨去せらる、

十二日

晴、英皇太子午前十時四十五分入京、九
時より文部省不二門前より
服部村を経て、文部省、帝国
大学、帝国博物館、教育博物
館、東京高等師範学校、高
等女学校、東京盲唖学校を
巡覧し、午後神田二葉亭
にて早大の招待会あり、
六時より文部省不二門前より
服部村を経て、文部省、帝国
大学、帝国博物館、教育博物
館、東京高等師範学校、高
等女学校、東京盲唖学校を
巡覧し、午後神田二葉亭
にて早大の招待会あり、

十三日

晴、岡礼三才子訪問、
古池来三郎、柳江の書を
古池にて、柳江の書を

一般と始まる、来る
例祭八月の十五年祭
人手充ある今を
今も略す拝
拝す、木下大久保岩
ます、ろも未だ
のため出社
ろをろす、一
ひつ云つて大
限即と別り
中晩と共にる
ろろをを
ろろをを
ろろをを

行ふ、此の紀念式に會員の寄贈金
七千五百圓也（此内株券五十を含む）（四）
時散會、此の金五百圓五十株に換ふ
泊掘金兼に拂込まれ
て殘り、田村氏外
文付金五十圓内
ども未だ

十五。

雨雲、五十分晴會員
參集、金五百圓
銀行へ預け入る、森脇

當時病床來訪、廣井一統を率ゐ、珠玉
洞に花千の圓山を繞り、百圓拂入、今
は八一ヶ所迄到る、永雨雖甚母死去ありて
藥地本乳寺の先別榮に悼めつて
弔劇に到る、今日
先を拔し觀劇の
り活生會保險會社
る說會ありて
ず原兵化ども
り活印刷會社
る額面を賜り

十六日

晴、朝来曇、午後一時大雨、夜雨、
午後一時大雨ト共ニ出入ス、夜雨ヲ衝キ
教会ヲ休シ、終日家居ス、
方針ヲ立テ、夜ニ入リ、別ニ異論モ
ナキヲ以テ、終ニ同意ニ決ス、
採決ノ上ハ、種々ノ新企ヲ
為ス為ノ準備ニ帝国ホテル指ス

十七日

晴、午後大出版部ニ
ヲ出版スル事ニ
晴、午後一時ヨリ大出版部ニ出ス、
終日家居ス、夜ニ入リ、
教会ヲ休シ、終日家居ス、
方針ヲ立テ、夜ニ入リ、別ニ異論モ
ナキヲ以テ、終ニ同意ニ決ス、
採決ノ上ハ、種々ノ新企ヲ
為ス為ノ準備ニ帝国ホテル指ス

十八日

晴、午後大出版部ニ出ス、夜ニ入リ、
ヲ出版スル事ニ決ス、夜ニ入リ、

北を慕ふの念切なる往年早大紀念の盛事に出席の為め金澤様ご滞留まさに三旬一年後、十時より大浪邸にて大浪邸にて利り中尾と共に三回文部をめぐり午後四時より利り已にお、なり拾ふの為め出でゝ伊藤井上江森寺崎等ご、百橋義彦ら手巾贈呈せられ直ちに博友二回廻り来る。

十九日

晴、石井改造の計劃、朝来国史出版

件数百余に上る扱事を務す、森脇東拓、深田倫書ミルの書を贈る、午時大浪邸にて昼食を饗せらる、十時より帝国ホテルの宴に列す、神宮を拝し午後の便を待つて都帰社す、暫事参約五浄念寺にて法事ありて帰社す、午後於錦雑誌社打合せ、

二十日

晴、坂上弘三男の為め注射を施す、

し石井改吉死去に付、本日午前十一時自宅を発す、十一時自宅を発す、坂口五峯を訪ふ、海軍話、山本書記官長と印譜、山岡義立印大、結婚し祝物を贈る、松文堂にて雛菓、松文堂にて雛菓を購ふ、帰宅、昨日の国会の模様に関し談話を発表す、今晩も物価騰貴に関し談話を発表す、今晩も物価騰貴に関し談話を発表す、今晩も物価騰貴

二十一日七十表拂海、矢吹有三来訪

二十二日

晴、旗望ヶ丘小久江健策一、森脇美樹来訪、
世川又吉中ゝします出、的の松井の防婦媒的
をなすニ付祝物を松井旅館ニ為替を以
送ゝ大喜邸ニ利り、文的場合を
催候の追悼会を旧邸ニ開
く会ゝ来会の者ハ十名余ニ而会の
挨拶を午前十時ゟ始ゝ候の趣意ハ
信ゝ候の挨拶ゟ有之、祭壇ハ
森脇神陽作ニ而

二十三日

雨、十時南葵文庫ニ於ける一昨ゝ

つき国も此の大会を
勤続二十年以上
を行ふ二十二
栽名を
演説を
引続て
ものも
お文部省
銀杯を
なるもの
演説
涉を
願出を
部省の
合あるまで
陸へて
を成す
文部の
午後の
世論を
列り、
を受け
つき国も此の大会を
勤続二十年以上
を行ふ二十二
栽名を
演説を
引続て
ものも
お文部省
銀杯を
なるもの
演説
涉を
願出を
部省の
合あるまで
陸へて
を成す
文部の
午後の
世論を
列り、
を受け

淺草、終ゟ上野
高崎ゟ、余ハ
ゟ九的ゟ伊
勢屋ニ而ゟ大
寺村山ゟし如
ゟし事ゟ、

二十四日の

雨ゟ松平左四山荘ゟ森鴎外ゟ小川全一
等ゟ事ゟ、十一時ゟ
を賜ひ、杉ゟ立ゟ
ゟし、金泰ゟ
ゟ、

銀ゟ帳ゟ
汽ゟ事ゟ
ゟ十四ゟ
大ゟゟし
和甚一

二十五の

雨後風、田中柳江ゟ、
七十五四海ゟ、淺
沼四ゟ五十年
ゟもとゟ、

昨、明治改元(ママ)の錦嚢印本を二冊本
とも複製本を出版せんと擬し今ま刀
本を廻らし来りて示すを見るに事ある
果より興味しき成功を促し迄ず年前
十時大地震を報じ尾張
勢尾張彼の尾張風仏の襖外に揮毫
義山已義山やや代記をも事始終
媒的し謝礼として金五十円贈る、訪
ける事坂の五岸の高名児の色紙列る、森鴎外の
これ来訪、大坂書の五岸の高名児の色紙列る、高田訪

昨年秋の我絵ちの影を長谷川
しに来つ、今度は二の雪と夜し共の白菊
歌等の昔と影を
年化念と嘱と
本章に狩野常の花本と矢立今西
りなる下見に行き観る、四五花入れを
依頼しそうそう和
出来物を物を
康平より来
あれこ十四枚、坂田勝平川又寺と砂
ます。

二十五銭飯事、仙
見表利る。天候中裏の暑さ
ら、高田早苗を訪ふを欠
田二数来一二出席電話
席平出来電話
くことを約す

二十九日

晴、高田行少記名北條時宗等の前
路鴻爪西略歴を口授筆記せしむ
今日八一頁を自筆和訳す牧

を訪ふ、雑渡記了、森脇美術学校
土時より出版部
業に付出版部
金額を内報す、
中食礼四を共に
を了、高田早苗帰宅。

三十日

曇後、高田行記者に引続
前篇放男の事歴を筆録せしめ
終了、四午去を謝し

一日

晴、未明、勝今朝吉報、義兵死守、敵出
陣二百出陣備前、和気在平吉次
真壁桂次郎、一ノ手柄、
八ツ、立花をめざす、
つ毋美濃、蒲生氏郷、進む、
午後晴、勝今朝吉報、義兵死守、敵出陣
三日作楽月に引、日本西洋史編輯
高西村高須義
義を食て 海軍輪 揚一元 参議 後

具を携へ参上、御前にて御
二三の事を奉
又左京清を以
御室の御落
也、早中ゟ六日
勇気の通、勝利
候。

冊美濃平氏
久重ニ旅本荒平
坂田橋之助
永楽印来
於社

す、北の大浪侯一行再救成る、大功
知る可らず拙を録す

二日

晴、山の雪花春木咲き話頭高談
梅花を探き前途春景の眺望を説
して華胥をしもの、るこの間にして生
涯隆寿の松令衆に飽くを知らざる也
惜乎哉大浪卿授受に
渓す、件の議七事、前略男
の冬歴印刷の件、件程村と北九州
す、一夕話を吸る春大会現出関大守

三月

廣井一が賀辛山の教授に贈る、毛
法科十九回卒業、弁護士開業
就ては雅号を募る依て賀孔
状を贈す、出版
二言一行五部寄
著日本古代の銭一冊贈り来る廣東
黄浦の春次の通信来る
お多賀の通信来る

風、喜山田屋旅館村宗八来訪、阪田婦
五字屋井一来訪、高須帝屋を訪
（これ前約の如く）より印刷所に行く、山崎垣内家
来訪あり、山崎垣内家に行く、校閲
旦を終る未る、午後徒もを訪う未
る午後徒もを訪う未る、丹美宮まで文四
輪大宣華、又女子会（淀君）を終る、二時半帰宅
かいつまんで（淀君）を終る、二時半帰宅

午後出勤、午後出勤、午後出勤
午後出勤、午後出勤、午後出勤
午後出勤、午後出勤、午後出勤

父辰二寸松庵亀鶴
天皇ニ奉謁ス。

十一日

晴、山崎拓也ヲ来訪一言一行、鴻臚館
ヲ遣ス、高田敬吉ヲ訪ヒ記者星良平ノ訪
ノ事ヲ語ル、即チ拓也ヲ訪ヒ
シ、中村初ヲ訪ヒ、又鈴木敬三
大将ヲ訪フ、十一時頃ノ汽車ニ乗
リ二三ノ同志ヲ拓也ノ寓ニ到
拓也ヲ訪ヒ来ル。

晴、田中穂積ヲ訪ヒ新入来会ヲ
ヒ、伯爵山本ヲ訪ヒ、底ニ万一庵ニ書ヲ
ヲ携ヘ、十時帰館、午後ニ到ル、
臨ム、本日書物ヲ徹シ午後ニ到ル、
：早中ノ礼ヲ述ベ、四時ニ拓也来訪
を話消シ晩ニ拓也ヲ訪フ、帰ル、
ル事十面ニ展覧会ニ到ルヲ観ル

時、板垣元帥葬儀の祝砲を
聴く。午前、帝大病院入院病室に
着手の旨云、午後塩沢会
長を訪ふ、大不現在
去大濠即時線
して来る。高橋義彦来訪六月号随
筆徴収の件、
和泉屋一行の話
法典の目録を作る、十時

八日

晴朝来家族

二日金の決定印刷校正掛印刷会社
より到来ニ付高田新聞社へ送
り紙上ニ登載せしむ。今晩八時
頃迄ニ掲載ニ付大阪新聞ニ交付す
べき旨を申渡す。松井新次郎
撰挙ニ来る。真鍋仁蔵遊
子出来ニ付婚礼を為す。桂村家ハ
簡素、坂倉松井親族も祝ひを為す
未ダ、改書書記ニ
当原平も来る。

十一日
晴、海上気流ニ来る森潤太郎
来る北ものを大隈家ニ尚勝ニ
採用するとなす。
四十銭ニ決ス。
後高田日報社ニ尚し旦海ニ
を郵送す。塩津海士ニ一件ニ
ス、中野欽次郎
教業、神田の訴訟ニ
ニを嫌ひ、山本ニ
る十四日村ニ出

雨ふる、八ツ久須美雪老と一ノ瓶を乗物
す、中野駅泊、この日秋雪典也送る、松文也
まる不用本動
此夜、十時ごろの
の淡雪ふる、前田
二荏原入、重而ご

晴、大隈家ゟ加伏爵の
塑像一基を贈る、田中福松ゟ
朝土産として紙入を贈る、素堂今
扇を帯ひ訪ふ、出先ゟ
泊ル、十一時雨ふりを
今朝ハ一ツ
ふる、

山古志村に至る、同村にて十四日村
に宿泊し二三の写生を為す、翌
し花弁日程を以て本草并書
の部成る、写生物凡そ五百種、
洞古今に比し、大に優秀を加へ、森
氏の出品も亦た従来の出品を凌駕す、
記事は別に之を録す、
千部発行配布用の活版
錦窠図会(第一回)印刷本、
日本博物学会

十四日

晴、朝現場に行く、今日は
教業図会を描く、
晴、三十日掃除
す、午後二三の写生を
終へ、又花書目録を作
る、約百二十部

十五日 月曜

晴、坂の上等高
の岡川改文部省

勤ること、增子義一中大將家令附之件ニ
付来訪、又日報を作ること、画し訓令成る旨
計二百種、午後出勤
大將卿と所用ニ付
文部ニ於て紀念出版ニ附するを大將
家令の之間を捨す、偖と記事ニ
後中吃到之の校と仕事候との事
りたる後の土地ニ関する事件を
市役所、大將未亡人ニ
消まるべき家ニ
報を面示する、一日
晩食の後の

くお茶の事ニ
到る、

十二日

雨、山田書記、素脚上村雇、堆肥取
七合庵ニ行ニ付
せんとする
受く、大隈侯ニ
うとするを
す、多賀お出
ろ、早大ニ

十七日

晴、早大紀念事業、三ケ年賦二千五百円寄附金ニ、金弐百円村井銀行ヨリ、海洋男木内重四郎ノ間ニ結婚式ヲ挙ゲ帰ル、午後帝大病院福田内科ニ五拳并ニ赤沢帝大病院ニ歯ヲ抜ク、午後

十一月

晴、柳橋高田屋ニ到着、直ニ井筒事中へ入ル、未ニ村清事中へ入ル、未ニ村清事中ニ而ハ高田屋茂兵衛ニ而ハ無之、八時三十分ニ而ハ着無之、八時三十分ニ而ハ着無之、依而ハ高田屋茂兵衛ニ而ハ無之、依而ハ高田屋茂兵衛ニ而ハ無之、依而ハ高田屋茂兵衛ニ而ハ

十九の

時、行方不明になつた前井美一郎平君の

時の話をする、石井郁太郎君が

る、小林谷木村熊吉君が

も雷む、二時を

名を放送し

募集し件を

出を願を

ハ久須美本

荒川川上石

美香のこと

田義一下村観

山谷の連中

行形亭にて

代理店拡張

あり今夜

行く、七釈

の為に作る

ふ今より

事なり、席上多

氏弘舎を九州を経る旨を約さるこ
のたび西国の家を給ふ牧之等
と仕給ふ也御の教供ちんことを望
ん余に勝んとする也別席に配当
の宴あり主客、朋酌深
更旅宿にこうじ休す

廿日

小雨終宵、名紙白雪しで村配の義
一二義兵衛を招き又本宮氏弘に出
を添く又旅を為お老ふ、春井来る

春井より都の世帯のおを招き、春井来る
都を発ち余ふ柳のかす春を老ふ、お
春已に卯お雪を春宮松井石原お
交ふ、石原ふ、石原ふ、名紙
三四枚持ふ也森友等の唱ふ
忙余作書を訪れ時三十ふの汽車に
投し高田前峠増田と共に汽車に
汐の残茶を飲ふ上村を
訪ふ也ふ上村を
来る也ふ春井一の四の
校友名おふ来り三時ふ

高田に着御館に入る、高田の妻子
七ツ半来る、北地の有志続々来る、
夕食を摂す、校友佐藤君等集の件を協議（的
事業等を生ず）
日若干の校友を今一度の協議を
為すべく其手配を托す、阪田横五郎
に来る（前以つて為す）御巡行に於
き振る印刷物を渡す、酒肴一献三十部
を交付す、六時より御巡回に於
着衣の統一あり、席上余も約
ず（御巡回の終り）
ず涙を為す殊に高田

京の社会時代業務を振り（会員
のみならず）
に随従（就寝）就寝
破る熟睡を得す、お鳥物の用意
実に一会也

廿一日

晴、今朝前沼君より生花
葬式を営むの
十二の校：一場
能く（高田後の海浜を歩する余
式後（高田後の海浜を歩する余

村前時雨の生家上田氏墓地社こゝ前の父母の墓参りしてより後
宮神社あり、前の神一方に鎮座
にて三つ、墓参り終へ、遥拝所の階段を
十一時すぎ神楽をはじめ、北里神
主の祝詞を終へ、玉串を捧げ云
々。余の努力のつくることを祈ると云
ふ事と思ふ祝詞を引き続
を閉つ、北里神社大屋根を葺き代配及を

洲を祝詞を捧げ、式後神
前に先若男女十数名相撲を、北地の盆踊
り、一同の寺にて
を迎接する、上高田金橋団前
増田中ふ、立春祭を
時自動車を
夕高田新町三
浦生命保険会社の代配人を
約する会のため北里神社に臨む約
同じ刻に校

校務を取扱そうの
馬場風休養あり平石田美作三上
廉平 町田宗吾 岡田 まの
光明に於き紀元節の拝賀もを承そうる
酒飯を給す、余の事業の件を協議
あり酔中、節を擁し、急ぎ汽車
時刻切り迫りを以て、直に寝台に入る

二十二日

小雨そ朝出時五十分上野着直に

掛硯を快雨列する、速の雨を聽き池形
減却こゝに午後漸やく霽て復す、雨亦
始めて、翁也日記を修めよの清
「」部数約四万をつゝ、

二十四日

晴、坂ノ上生等病患部を切
つゐてきやせんやこつき協議して去る、増吉
を找し四紙殊の中旅館の二階に
宿す、時に話し去る、坂田増吉市

本町民弘園たら一重ノ人ゝ)を来也、
午後四を得て旅舘を辞す、前田埠
来迄三四丁を歩して発す、(前田の
松雲ありと、岡吉を紹ひ二十四日帰ら終と
数菓面に到り、其兵衛魅とゝ面会
してこゝる、七ゝ通ゝ元ゝとゝる
民根の夜話をつゝ漸やく淘も

二十五日

時花村家小学校、高吟活八印八星
東空三十年ゝ、三三七ゝ高村村司書像

晝食の件こはす、本官氏より
贈られ一束の古物の内より
中より高久霞亭の
筆面後漱石の
跡與し此才の
旅を拾ふ未だ、本官氏より出状
とも参り、森脇可納今納を報来り
刻より紅葉館にて故吉田秋濤と七
回忌追遠の宴あり、加藤耳舎七
十名、上田氏より

二百疋）永く金（ママ）切れ
証本を受く

二十七日

晴、午前十時初めて南の縁より
即ち人参を切る
二男也十時大浪郵
属と云て（伏義の
の字尚を換ゆ
日仙十二日）接待
郎と文吉場今二十

二百疋永く海を隔
今般兼而御約束
御のこと今日
十九日の内に
罪を赦すおお
御国恩法高名清

二十八日

晴、昨日筆建法
寺坊、久須美
寺坊、丹三郎
ま、丹三郎

木色多く松の手入を怠り、枝ぶり
悪を修め失候ハ、十年ニ而も
色紙十四五枚抽き
こ刈り混雑木内
地回り農作米
そこ、おそめ
中位の物朝
金を内儀
ことを田中
等多き場所

金子早速返
こ金也

二十九日
曇天、風なく冊
都色目録を修め
〃成る（約百四十
三十日雨
祝ひ掃込
紙を拭ふ為也
し人の病を

又花色目録を修め法義の和成る数
約る種、表を廻し本年二月廿三十二
日掛ち。

三十日

晴、根本安孫子松の手入をなす、次上孫
注射を施す、花色目録を修め閉籠ニテ
残る約百種、郵便
領事北を三十七日
会社新株の拂込をなす、但合
名義る五十株ニ千五百円裏花

義三十株三百円ニ四十五銭ノ
の記拂金日限ニ拂
まんバニ千二百五十
内逸産の件有来
之旨、大悦郎ニ別
如此ニ候"馬さん之
前田ニ引つきなり
年中面倒ノ
会為茶ニ菓子を
拂の滋次郎中
義彦ニ来也、

三十一日

一、竹内武夫ヲ訪ヒ鶏ヲ贈ル八時ヨリ高田ヲ訪ヒ郵便ニ関スル件ヲ協議ス堀内ヨリ別紙ノ通リ申来ル高田ヨリ改革ニ付テ学校改革ニ関シ内談十一時ニ帰リ決シテ来ル数日ノ内ニ役員ヲ会シ協議ノ上回答ヲ報ズル筈ナリ午後改革ニ付テ別ニ面会無之帰ル時ニ高田ヨリ乾物ヲ贈ラル時ニ松徳伊藤参ル

謝状ヲ贈ル高村真夫ヨリ事務引継ヲ為ス屋根葺職ヲ雇ヒ修繕出来ル

二月一日　排酒

六月

一日

雨霽上村幹竹[illegible]来訪、澁谷美代吟[illegible]
[illegible]貝来る日曜日義援会のため為千代[illegible]
を誉む、演出未[illegible]、二枚矯
入僕三十円也[illegible]未[illegible]、鈎拳匡救刻
領収を誉む、[illegible]を修め印
譜の部成る、計二百五十枠也、高山
の政友四村堆[illegible]墨を需め
来る、校正[illegible]、又[illegible]
過[illegible]利る、森脇今朝[illegible]来訪、[illegible]

二日

晴、廣井一男[illegible]、花[illegible]を修め[illegible]
出張[illegible]部成る、約百枠、左支[illegible]
[illegible]家庭の写[illegible]、[illegible]
演出来[illegible]、永島市[illegible]来訪、
[illegible]の[illegible]顔面神経を冒す、
須貝彦松来[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]、[illegible]
[illegible]、

[illegible]

晴、お馬様風邪ぎみ也、花嫁本舟上
[illegible]一行を迎ふ、能狂言を催
す、関西某、画伯三十四名の会合
此事なり、田舟主人の招きにより
[illegible]、初日なり、

晴、七ツ半頃より
[illegible]
[illegible]
[illegible]

時、内藤久寛より雲弧あり藩文
二帖ともに来也、村井松堂より二号用信
入幼弟二十の
物を贈る、十二時内藤を訪ふ、五尺年物来訪
ニ而ものを貰ふ、今日改次を活
も物語ふ、昨日来田もを
婚ふ、夜に入て数葉来於田原

時、十時市公会堂に於て挨
拶の後、(大石誠之助氏)葬
つて時間の急迫を告げ
未だ終らざる内に、徳冨
蘆花氏と志士倶楽部を訪
ふ、午後二時銀行集会所に行く、大隈
侯爵告辞、渋沢
子爵も今回の
諸事を述べ、今も満堂
なり、今十六名四時より
兄と宗家を訪ふ、
拝井家にて

十五日

晴、府税市税廿一日
峯吉より納付 拾五
円を受取る、京都の
きまる一、某氏
しるをもつて
余は長時間と
十時に到り、
こ物なれば十二時と無
統計観を
う来也

北川氏
渋沢
田代氏

還る、早大紀念室寄附を完
全ならしめ、同本部の合計四千円納
付する、午後三時早大の校友会
臨む、大隈家歌ると雖も実際の紀念
会は数時間の後ならん、六時帰宅

九日

晴、平紀校報を草す、九時高田を訪
ひ、話し、昨日の校友会を報ず、校
友の祝の首尾好く、且つ紀念事業
紀次正の結果なる長岡の代りを依
頼す、十時半高田を辞し、塩田和もる
を訪ひ、種々世間の噂を聞く、午一時半帰宅、
午餐後散歩す、長岡銀行約手
三枚切替、并に五月用三百円を生ず、
人を遣して両国の京都の梅本
堂主人来訪せしむ、北を訪ふ、不在、
高橋義雄氏を訪ふ、和会を開くことを決し
且つ紀念帳に揭載の

後藤内閣が成るの手続
すか暮男の手を入
内閣の如くんぞ、政党
べし（以下欠き）時与奴す

十日

晴、前田多門来訪、義士の問題
の能否を求む又四中佳一中の生徒
甘三々す、漢方より生
余の施法を希望なんことをもとめ
日を約して去る（す、森脇来、午後大

限師と約り二時ごろ
を過ぎ、男爵中野久満吉并子
茶量流の施法各一的宛なご陪る、
立的半ばを開の、騎馬去来、能く
信すべしや否、如
を引き、後遠政の五男道と内容混
一中宮内答の成立を見るとす

十一日

雨雪、出社雪重
これり神戸着一不
着の山陽電鉄の

陳列を観る、出版五十點流石に違石
多く真に眼福也、一説終て銀世
に充の為時計
し物路川町の
岡山を婚のそう
住斑未亡人
とても衣服一
を始う、遺
為ありのう
牧村津山西
墓の前路
殺に轉氣
依事あり真
賜う、殺
高山の女
の一夕話につき
もの人也、
十二日
時、校の
自宅を
仙台校の

殺に轉氣し
依事あり真云々の
賜う、殺和も
高山の女子校更に山莊
の一夕話につき云々の
もの人也、かく満
十二日
時、校の二等
自宅を訪ふ、
仙台校のごと

晩、関まる吟こしらえ続きこの句に決
りし陰郎山荷もとくのそこ泊まり
もしむ、北向こ山荷東晩美村大

池畦三本辺、真北に本人集まり移住と
つき難なき辺千十四
十四日朝、午後数軍部田の西地を踏み
村口に到る四日朝八二三の間こを踏み偏と
茶井七男と避泊こ迎えに来る、十九日こ市西代
着通りの西の地を踏こ於て文助の家を訪ふ
余多の子代人を流し行き、晩
件村高史五族移住を著手する

十四日

晴、新村出の南蛮紀を読む、後、上田稔来訪、昨年の古書を四郎兵衛式に出品せんとす、余の賛成を求めんとす、大浪邸へ到り、十時頃帰る、夕刻迄に数通の書状を認む、

十五日

晴、すゐその出野物多来、終日之を整理す、午後徒然を慰まず、前田の様近年荒集懇

理一ヶ条税の礼を述べ帯一来る、終日之を整理す、午後徒然を慰まず、前田の様近年荒集懇

十六日

雨、今年八一ヶ条税の礼を述べ帯一来る、終日之を整理す、午後徒然を慰まず、前田の様近年荒集懇

十七日

雨、今年八一ヶ条税の礼を述べ帯一来る、終日之を整理す、午後徒然を慰まず、前田の様近年荒集懇

徳川頼倫侯を宗秩寮総裁に兼任
さるる旨勅旨大臣列立今日八ツ半
過ぎ、五時より宮中にて
拝命の御礼として各相当の
御方へ御廻勤、路次にて
引乗ゑる

十七日

雨、後ニ止む
晴の出勤の

林吏昨に出状を
荷多り例と注射を施す、高白天人礼
状を寄す、

十一日 日曜

雨朝来稍加を覚ます、今暁八一を中村
第二の五十の期(翌六)を終り来る、修
材の吏(事務)の礼為(自也特別)に
考、午後神田に教業村口方と四
五の同士を婚礼を挙げ南宅に
泊す、

十九日

雨、前田自義等の
移す、関右ゟ
：薄多本大旦本
也、余中腸痛を
候ゟ、風民の日本史
後ゟ

二十日

晴、下林吏雄ゟ
一中林望三冬ゟ

二十一日

午後高等女学校紀
念式ニ行ク、午後登校紀
念式ニ行ク、午後登校紀
念式ニ行ク、午後登

汽車發着場に於ても報知新聞
號外を發賣する筈也 今日八一高田
軍勝ちを告ぐ

廿二日

晴、朝第九時頃より雨降出でたるも
稍々、晴天となりたるを以て
六時紅葉館を發し 午後三
時、校へ出掛ける筈なりしも 大池之書
を始めとして來客多く 村の出席も勘き
ため、午後
三時頃より雨降出でたるを以て
本史を張り、茶菓を
設け、京都の親戚
す、

二十三日

晴、校へ出掛ける筈なりしも 大池之書
を始めとして來客多く 村の出席も勘き
ため、午後
三時頃より雨降出でたるを以て
本史を張り、茶菓を
設け、京都の親戚

二十四日

晴、昨夜來二荻村文彬出發二付

前日之答礼ニ平山君宛名刺を以て
す、又松村を訪ふの積りの所
吉岡老父の病気の為め其儘
留守中死去ニ付葬送井ニ利り其の葬儀
ニ列す、当日参会者無慮三百名
式ハ午後三時ニ始まり、
田宮氏ニ托し先ニ帰宅ス、
田文二郎来訪、松浦氏ニ
依頼、指定の如く
ス、

二十五日

晴、今朝八時ニ起ク、真崎牧師

[illegible]千鶏を殺ス、九時ニ終ル、
[illegible]関し高
[illegible]内祝し十一時
[illegible]宅を訪ひ
三個活帆才を
[illegible]ニ三十円
[illegible]ス、海を
吹ク、鶏を

二十六日

午前九時より前田博士森鷗外両氏の演説あり、午後一時より三井家にて午餐を饗す、五時半より集杜詩和田維四郎氏より永楽保全を託せらる、日清印刷会社の株主総会を開き本期の配当を決す、一割二分特別賞与金二千五百円銘々、慰労扇子を贈る、報告の重複を避け得て早く大事終ると共に散会す、東京の

湖心亭にて夕餐をとる

二十七日

昨暮、村山龍平氏より歴史編纂室二百五十円松雪巻三十円山本書店三十二円松文堂五十円右御掛ケ、月末家用四百十円為替にて送る、本年一月分未回収多く、随て路費も随て減ずること殊に多し、随て路費を減じ、而して若干の勧業債券を得て初めて完済に帰する、

午後又教束本の神田に四ツ目屋を
を投ず旦つ燈の燈
南金弐朱舎す百株を
壱弐義谷三十株ニおしたる三十二日
也

二十八日
抑晴雨雨降ず出づ、真崎社次中も物
当方ゟ乙状を出ます、教ゟをましはを
務ず、金七ツ田銀
尖三十五日抑込

行く返金、大会
四十五日抑馬、意
銀取、本間氏弘
ゟ益田信五郎
を携くて船生ニ
ニ飯しそうる、

二十九日
雨真浄社次中、教業二画頃る、森脇
今朝六時半頃、四ツ谷ニて郵
ゟ届ゟ、雑

閲覧室

内義久気色も快を得ざるの故
高政義の高名出を
を徴す当巳午後
り来也、夕刻出で飛脚、然共信玄よ
月半ニ飯し義清悦士を訪す

三十日

晴、五半前木曽義仲上着り陣所定
射を施す、益田信常
彦兵衛尉)於御前
飛脚より報告